

図書室月報

2023年(令和5年)7月5日

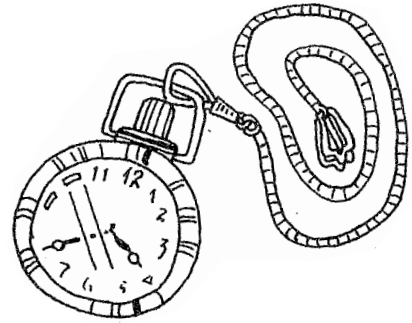
第722号

〈図書室のつどい 参加者の感想〉

田中直 講演

「持続可能な社会をつくる 〈適正技術〉とは」を受講して

山本 隆夫



講師の田中直さんは1980年代から国際協力活動の一環として、インドネシアで排水処理施設を、現地の人々と協業して工夫を重ねて実績を積み重ねてきたことを説明しました。同時に、今日の世界が直面している多くの問題を改善する方策を提示してきたことまでお話が展開しました。

田中さんたちが進めてきたインドネシアや中国における排水処理装置を現地の状況に適応したかたちで導入してきたことはインドネシアなどの国にとっても貢献していますが、一方で開発途上国において展開をできても先進国の米欧や日本では、排水処理に困ることも日常ほとんど無いので、適正な技術を導入する必要はないと思います、講座の終盤の質問の際に私は田中さんに、「日本のような先進国には、適正技術の導入は難しいのではないのでしょうか？」と疑問を投げかけました。田中さんは、「日本に比べると、インドネシアには地域における会社や職人が充実しています。持続可能(SUSTAINABLE)な社会や経済という意味あいでは、インドネシアにおける適応力や柔軟性は日本より優れていることも

あります」と答えました。私は内心驚きました。日本は、開発途上国に対して生産技術の面では凌駕している長い間にわたって思ってきた。インドネシアの現地で地域に応じた排水処理システムを試行錯誤で運営していく業務を、30年余り積み重ねてきた田中さんの言葉に自分の不見識を自覚せざるを得ませんでした。

田中さんは、近代科学技術への批判の中で生まれてきた適正技術を1960年代から振り返り、今日の世界の中核的な問題として貧困と格差、環境と資源、人間・労働疎外の三つの問題を挙げて、私たちの世界が持続不可能性を露呈している問題を投げかけます。三つの問題の実例が、写真や比較表、図で示されて、世界の歴史の事象を参照しつつ議論が進められました。三つの問題をもたらし

ている構造として、社会や経済を動かしてきた二つの駆動力である資本主義と近代科学技術に思索が及びます。インドネシアで排水処理施設を現地の社会や経済の中で定着させることは、田中さんにとつては近代科学技術がもたらす弊害を改善することにつながっています。

す。具体的には、それぞれの地域の条件に適合的で、住民のニーズ(特に、水、食糧、エネルギー、住居、衛生等)を効果的に満たす技術を選択または提供する、貧困と格差の問題の本質的解決は、人々がやりがいをもって取り組めるような仕事をその場の状況に応じて適正に生み出していく、環境と調和的なシステムを作る、再生可能エネルギーに適する小規模分散型システムの構築などを実践することです。その実践をふまえて、田中さんは、まだ粗い構想段階ではあるものの、既存の資本主義経済システムに代わる、新しい経済システムの先駆となる事業体として、ユニバーサル・コープを提案します。ユニバーサル・コープは従来型の協同組合とは違い、組合員は投資、製造、販売などのグループに分けられ、各グループの決定権は差別化することができます。詳細についてはここでは記述をしません。現在の社会や経済が直面している問題に対応する説得力のある一つの方向性だと思いました。

(次頁へつづく)

私たちの社会や経済は難しい問題に囲まれています。私の住む町にとどまらず、日本や世界においても貧困と格差、環境と資源、人間・労働疎外の三つの問題群に囲まれて手をこまねいている状態です。しかし、

田中さんは世界が持続可能で、人々が豊かに暮らしていけるものにするためには、どのような技術を開発・選択・普及させていけばいいか、またそれを含めた、望ましい未来社会の全体的枠組みを目指すことは現実の困難を切り開いていく有力な方法ではないかと思を進めます。哲学や倫理、思想について深く考えるところに、現在の社会や経済に大きく影響を与える科学技術を適正技術の観点から見直していく、困難ではあるけれど前に向けて進んでいく行動倫理を示しているという期待をもちました。

田中直著『適正技術と代替社会—インドネシアでの実践から』(岩波新書)、『現代適正技術論序説—近代科学技術に代わる技術体系をめぐって』(社会評論社)ほか



ブッククラブから

藤野可織著『ドレス』を読んで

中島三恵子

朝のポストに公民館だよりがあった。

私が楽しみにしている広報だ。そろそろブッククラブのお知らせが……見つけた。テーマは「記憶の欠片をひろい集めて」、そして一人ひとりに違った景色が見えてくると書かれていた。魅力的な言葉だ。これはどう読んでも、どう感じてOKということか。浅読みの本領発揮で早速作品の『ドレス』を手に入れる。まずこの薄さは私好みだ。短編なのも嬉しい限り。読み始めは、一見シンプルな日常が、あれよあれよと思う間におかしな世界に入っていく。主人公の彼女、右りの右耳にある鉄のイヤリング(そう、私も昔イヤ大昔に同じ様なイヤリングをしてた、しかしそこで止まったが。ここまではだんだんに親しみさえ感じる)この鉄のアクセサリーを作る秘密めいた店の名が「ドレス」なのだ。右りのイヤリングはだんだん大きくなり両耳全体を鉄がおおうようになる(彼は何故るりを止めないのか、尊重?嫌われたくないから?それとも愛ですか?何れにしても二人の間に理解する為の言葉がないのがもどか

しい)。

最後には全身鉄(甲冑)で覆われて彼の前に現れるのだ。もう笑うしかない! ピント外れは承知の上で私は些細な部分に気がなった。短編「テキサス、オクラハマ」は生肉色のパーカー、こんなパーカーが売り場にあつたら趣味悪(フル)としか思えん。主人公の恋人、圭はこのパーカーを残してドローンに消される、何故。

短編「マイ・ハート・イズ・ユアーズ」は最初の四行、今流行のアイドルあるあるだ、すぐ頭に浮かぶ、これが核となつてこの物語は出来たのではと思つた。

私はこの作品はチョットした日常から妄想をふくらませ、人間の矛盾をブラックユーモアで表したのか?と思つた。

サテ、山岸先生はこの作品をどの様な景色で見せてくださるかと思つた。先生は参加者の感想を交ぜながら丁寧に話してくださつたのだが、私は各々の作品に興味がありすぎて頭からすり抜け多し、どうにか残る幾つかの事はやはりメッセージ性の強い作品であると言う事、私にとっては固定観念からの脱

却が必要だった。

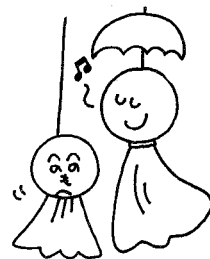
藤野可織の作品では、全てを平等に扱う。天は人の上に人を……なんて言う場合じゃない!人間と犬は勿論、ドローンだろうが骨格標本だろうが何もかも、男と女の性差も超えて、男性優位な昔話になつている。イヤ人間そのものが優位ではいられないのだ。人間が持つ観念(無意識的加害性)を含め物差しはすっぱり切り捨てられる。

そこは、言葉を尽くしても分かりやえない世界、何ものかにとられない世界なのだ。

少し言い方が雑になるが、全ての物、事がパーツとなつて再構築される、そこに新しい何かが見えてくる。生肉色のパーカーは悪趣味とかアイドルとかそんな話ではなかった。当然生肉は身体の一部(物化)でありアイドルは男性優位社会の反転現象だった。

しかし私は楽しく読んだ。一人ひとりが違った景色で良いと言うことでお許しください!

(河出文庫)



新着図書から

〈哲学 心理学 宗教〉

1万人の夢を分析した研究者が教える今すぐ眠りたくなる夢の話
松田英子 (ワニブックス) 145

聞く技術聞いてもらおう技術
東畑開人 (筑摩書房) 146

〈歴史〉

世界史のなかの近代日本
小風秀雅 (山川出版社) 210

無数のひとりが紡ぐ歴史
田中祐介 (文学通信) 210

「暗橋」で楽しむ東京さんぽ
高山英男 (美業之日本社) 291

イブン・バットウータの世界大旅行
家島彦一 (平凡社) 292

〈社会科学〉

思想史講義 戦前昭和篇
山口輝臣編 (筑摩書房) 309

さらば、男性政治
三浦まり (岩波書店) 312

流山がすごい
大西康之 (新潮社) 318

香川にモスクができるまで
岡内大三 (晶文社) 334

「暴力」から読み解く現代世界
伊達聖伸編 (東京大学出版会) 361

団地と共生
岡崎広樹 (論創社) 365

被害と加害のフェミニズム
クオンキムヒョン編著 (解放出版社) 367

ジェンダー平等社会の実現へ
杉井静子 (日本評論社) 367

父ではありませんが
武田砂鉄 (集英社) 367

災害と性暴力
Nursing Today ブックレット編集部 (日本看護協会出版会) 368

学校では教えてくれない生活保護
雨宮処凛 (河出書房新社) 369

障害者と健常者の関係形成の社会学
加藤旭人 (花伝社) 369

震災復興はどう引き継がれたか
北原糸子 (藤原書店) 369

だれも私たちに「失格の烙印」を押すことはできない
キムウォニョン (小学館) 369

社会の障害をみつつけよう
久野研二 (現代書館) 369

これからの教育社会学
相澤真一 (有斐閣) 371

戦後日本の夜間中学
江口怜 (東京大学出版会) 376

シベリア森林の民族誌
大石侑香 (昭和堂) 382

洋装の日本史
刑部芳則 (集英社インターナショナル) 383

コーヒーについてぼくと詩が語ること
小山伸二 (書肆梓) 383

baumクーヘンの文化史
三浦裕子 (青弓社) 383

なぜ理系に女性が少ないのか
横山広美 (幻冬舎) 407

地球外生命を探る
松井孝典 (山と溪谷社) 440

里山の植物生態学
加藤順 (全国農村教育協会) 471

植物の行動生態学
種生物学会 (文一総合出版) 471

〈工業〉
水のない川暗渠でたどる東京案内
本田創 (山川出版社) 517

へとへとも手を汚さずに今日のおかずがポリ袋でできちゃった
ほりえさちこ (主婦の友社) 596

〈産業〉
琉球切手を旅する
与那原恵 (中央公論新社) 693

若冲の歌を聴け
狩野博幸 (小学館) 721

ちひろ美術館の窓から
松本猛 (かもがわ出版) 726

中国の伝統色
郭浩 (翔泳社) 757

色を表すことばの辞典
国本学史 (ナツメ社) 757

映画のまなざし転移
斎藤環 (青土社) 778

映画の木洩れ日
川本三郎 (キネマ旬報社) 778

〈文学〉
私のものではない国で
温又柔 (中央公論新社) 91

パウエル・ツェランと中国の天使
多和田葉子 (文藝春秋) 91

文壇放浪
水上勉 (中央公論社) 91

ケヤキブンガク
ケヤキブンガク編集室 (ケヤキブンガク編集室) 91

ケヤキブンガク
ケヤキブンガク編集室 (ケヤキブンガク編集室) 910

くにたちブッククラブ

—記憶の欠片をひろい集めて—

佐藤泰志

『きみの鳥はうたえる』 (河出文庫)

講師 大木志門 (東海大学・日本近代文学)

とき 7月13日 (木)

夜7時半~9時半

ところ 公民館 地下ホール

申込先 公民館 ☎(572)5141

* 次回は9月21日 (木)
川越宗一『熱源』 (文春文庫) です。



〈一節〉

湯澤規子 著

「おふくろの味」幻想



故郷に暮らす人びと自身から発信される「おふくろの味を伝えよう」という意思を含んだ記録が一つの社会運動のように展開し、これは一九九〇年代まで持続する。その背景には社会や食の大変化があったことが想定される。

一九七〇年は、冷凍食品や欧米料理普及のためのパイロットレストランが披露された大阪万博開催の年であり、農業分野ではコメ余りによる「減反政策」が始まった年でもある。高度経済成長真つただ中のこの時期には、各地で工業化が進み、地域固有の暮らしが次々と失れ、忘れ去られようとしていた。こうした状況が各種団体による料理本出版に反映されている。(光文社)

図書室のついで

『旅と本と詩と』

講師 管啓次郎すが (詩人、明治大学)

本を読みたい。けれど、時間がない。買ったのは良いけど、「積読」になる。きちんと向き合おうとすればするほど、目の前からスルスルと本や言葉が逃げていく。そんな体験をしたことはありますか？

今回は、『本は読めないものだから心配するな』の著者であり、『星の王子さま』の翻訳者であり、世界中を旅し、詩人としてみずからも言葉を紡ぐ管さんに、旅と本と詩にまつわる3冊の新作を中心に語っていただきます。

本と言葉の海へと漕ぎ出す旅に、そっと背中を押してもらおう、そんなひと時にしたいと思います。

〈管さんの本〉

『本と貝殻』『一週間、その他の小さな旅』(コトニ社)、『エレメンタル―批評文集』(左右社) 他多数。

とき 8月6日(日)

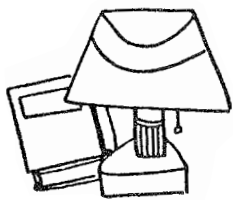
昼2時〜4時

ところ 公民館 地下ホール

定員 60名(申込先着順)

申込先 7月12日(水)朝9時〜

公民館 ☎(572)5141



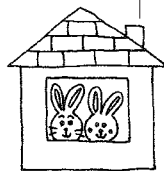
〈私の本棚から 第4回〉

大野裕之著

『ディズニーと

チャップリン』

―エンタメビジネスを生んだ巨人―



今村三郎

今年3月、作曲家の坂本龍一が亡くなりました。「戦場のメリークリスマス」などの映画音楽で世界的に知られた方でした。「サヨナラ」おじさんで知られた淀川長治さんが日曜洋画劇場の解説で、坂本の曲が見事であると、また、出演していた坂本やビートたけしを、演技が素晴らしいとほめていたのを覚えています。

その淀川さんといえばチャップリンに育てられたというほどの、チャップリンの大ファンでした。私も、チャップリンの「キッド」を見て、涙が止まらなくなり、ほかの観客に見つかからないように、映画館の外に出ました。また彼のアメリカでの最後の映画「ライムライト」は哀愁を込めた主題歌とともに、私の大好きな映画です。

また、淀川さんは、戦時中ディズニーの「白雪姫」を試写室で見て、その色の鮮やかさにびっくりし、このような素晴らしい映画を作る国に勝てるわけがないと思ったそうです。私もいくつかのディズニーの映画をみて、感激しました。のちに、子どもたちを連れて、ディズニールランドに、遊びに行くなどとも思ってもみませんでした。

チャップリンとディズニーという2大巨頭は、

ほぼ同じ時期にアメリカ映画に登場しています。「意外なことに、映画が生んだ」たった二人の本物の天才」についての比較研究は、これまで本格的になされてはいなかった」と作者の大野裕之さんは、表題の本に書いています。大野さんは主に関西で活躍する脚本家・演出家であり、日本チャップリン協会会長です。そしてこの本は二人の生い立ちから、初めての出会いと別れを描いています。

1932年、二人は初めて出会いました。「ディズニーは天にも昇る心地だった」その時、チャップリンはディズニーの才能を見抜き、「君はもつと伸びる。君の分野を完全に征服する時が必ず来る」と予言しました。「だけど、君が自立を守っていくには、自分の作品の著作権は他人の手に渡しちゃだめだ」と生涯にわたるビジネス面での、大きな助言をしました。

しかし、仲むつまじかった二人にも別れが来ます。ディズニーの社員のストライキを機に二人が直接会うことはありませんでした。常に弱者の側に立っていたチャップリンと組合つづぶしのディズニーでは合うはずがありません。

「逢うは別れのはじめ」とは、人生の中で繰り返されることですが……。ディズニーが最後に取り組んだ作品といえる「メリーポピンズ」と関わる、心打つ挿話も紹介されています。

今月はここまでにしませう。それでは、また来月お目にかかります。それまで サヨナラ。サヨナラ。

(光文社)